鼻口唇嚢胞 9 例の臨床的観察

石田 恵・曾田忠雄・小野 富昭
名倉英明・伊藤秀夫

Clinical observation on nine cases of nasolabial cyst

Satoshi ISHIDA・Tadao SODA・Toaki ONO
Hideaki NAGURA・Hideo ITOH

緒 言

鼻口唇嚢胞は鼻前庭外壁部から口唇上部にかけての軟組織に発生する嚢胞であって¹⁻⁶⁾、その成因については久保⁷⁾および Brown-Kelly らの貯溜嚢胞説^{8-12,28)} Brüggenmann らの胎生器官残存説ならびに Blumenthal, Klestadt らの顔裂性嚢胞¹³⁻²⁷⁾ 説が考えられており、一定していない。したがって 1893 年の Zuckerkandl の最初の報告以来、鼻前庭嚢胞、Klestadt 嚢胞、上顎粘液腺嚢胞、鼻翼嚢胞、鼻齒槽嚢胞あるいは齒槽外鼻嚢胞などさまざまな名称で呼ばれていたが、1971 年の WHO ではその出現部位から鼻口唇嚢胞 (Naso-labial cyst) の名称が採用されている。本嚢胞に関する多数例についての報告は耳鼻咽喉科領域からのもの⁷⁻³⁴⁾が多く、歯科領域からの報告^{7,35-52)}は1ないし2例の症例報告であるので、われわれは過去13年間に経験した 9 例について臨床的検討と文献的考察を試みた。

対 象

対象は1965年1月から1977年12月末までの13年間に当科で経験した 9 例で (表 1)、これは同期間の顔裂性嚢胞 48 例中の約 19% であった。

結果ならびに考察

1. 患者の性および年齢

患者の性別は男性 2 例、女性 7 例で、1 : 3.5 の割合で女性が多くなっていた。性別に関しては、Miller and More³¹⁾ が 82 の文献例に自験の 3 例を加えた 85 例では、

東京医科歯科大学歯学部第 2 口腔外科学教室
(主任：伊藤秀夫教授)

The Second Department of Oral Surgery, Faculty
of Dentistry Tokyo Medical and Dental University
(Chief: Prof. Hideo Itoh)

受付日：昭和54年7月26日

男性はわずかに 3 例のみであったと報告しているが、Crawford ら³⁰⁾ の 94 の文献例に自験例 2 例を加えた 96 例では、男性 20 例、女性 76 例となっており、また Roed-Petersen³¹⁾ の 5 例の自験例を加えた 116 例では、男性 (22%)、女性 90 例 (78%) で、女性は男性の約 3.5 倍となっており、われわれの経験例の男女比とはほぼ同じである。また教室の近藤³⁸⁾ らが報告した本邦における 86 例の統計も、男性 34 例、女性 52 例で女性が多くなっている。

図 1 症例 7 の写真
左側鼻翼部の腫脹がみられる。

図 2 症例 6 の写真
123 部の歯肉口唇移行部に腫脹がみられる。

表 1 鼻口唇嚢胞の症例の一覧表

症例	性	年齢	部位	大きさ	形	病恫期間	主 要 症 状				
							鼻翼・鼻 腔底部腫 脹	鼻唇溝消 失	口腔前庭 部腫脹	鼻閉感	眼窩下部 腫脹, 圧 痛
1	♀	51	左	拇指頭大	円形	20年	+	+	-	-	-
2	♀	66	右	拇指頭大	円形	5 か月	+	-	-	-	+
3	♀	31	左	小指頭大	楕円形	1 年	+	-	-	-	-
4	♂	23	左	小指頭大	円形	2 週間	+	-	+	-	-
5	♀	41	右	拇指頭大	楕円形	13年	+	-	-	-	-
6	♀	33	左	拇指頭大	楕円形	13か月	+	-	+	+	-
7	♀	45	左	小指頭大	楕円形	6か月	+	-	+	-	-
8	♀	30	左	小指頭大	円形	6か月	+	-	-	-	-
9	♂	40	右	拇指頭大	円形	10か月	+	+	-	-	-
計	♂: 2 ♀: 7	平均年齢 40歳	左: 6 右: 3	拇指頭大: 5 小指頭大: 4	円形: 5 楕円形: 4		9	2	2	1	1

図 3 症例 6 の造影 X 線写真

歳が最年長となっており⁵³⁾、平均年齢は男性が46歳、女性が41歳4か月と報告されており⁵¹⁾、本邦では平田⁵⁴⁾の16歳の女性が最年少、下村²³⁾の73歳が最年長のようなのである。このように本嚢胞は20歳以上の成人、特に女性に多いのであるが、上皮芽や腺分泌が活発になる性的成熟期、妊娠ないしは閉経などによる何らかの変調と関係があるのではないかと考えられており、また外傷も誘因として考えられている⁵⁵⁾

2. 主要症状および病恫期間

本嚢胞は鼻前庭外壁から口唇上部、あるいは下鼻甲介の側壁下部などの軟組織内に発生し、嚢胞が大きくなると鼻翼基部から口唇上部にかけて腫脹が現れ、鼻唇溝が消失する。また鼻腔底が隆起していわゆる Gerber の隆起が現れ、さらには鼻閉塞感もきたすことがあるといわれている。口腔内では上嘴唇の内側面にも腫脹が現れ、口腔前庭が浅くなることが多い。また2次感染によって急性腫脹と疼痛、あるいは鼻腔底や口唇に瘻を形成することもある。われわれの9例の主要症状は鼻翼部および口唇上部の腫脹(図1)は全例にみられたが、鼻唇溝の消失は2例のみであった。3例には口唇内側にも腫脹(図2)がみられ、そのうちの1例は鼻前庭の隆起も著明で鼻閉塞感を伴っていた。その他、眼窩下部の腫脹と自発痛が1例ずつあったが、瘻形成の症例はなかった。

本嚢胞の発生は通常片側性で、われわれの9例も左側6例、右側3例であったが、近藤らの統計では左側30例、右側44例、正中部5例および両側性4例であり、Roed-Petersen の116例では、102例は片側性で左右差はなく、両側性は13例(11.2%)となっている。

症状に気づいてから来院するまでのいわゆる病恫期間は一般に長く、Burtshi and Stout⁴⁶⁾の37年間という症例もある。われわれの9例では6か月以内が4例、1年

患者の年齢は、最年少が23歳、最年長が66歳で、30歳代と40歳代がそれぞれ3例ずつ、20歳代、50歳代および60歳代が1例ずつであり、平均年齢は40歳であった。Roed-Petersen の報告では、10歳代4.7%、20歳代17.0%、30歳代26.4%、40歳代22.6%、50歳代14.2%、60歳代9.4%、70歳代5.7%で、30歳から49歳の間が多くなっており、また近藤らの本邦の統計では、10歳代7.0%、20歳代38.4%、30歳代26.7%、40歳代17.4%、50歳以上10.5%で、20歳代が最も多くなっている。Waldrep ら⁴⁹⁾の4か月の乳児に発見されたとの報告もあるが、一般には欧米では Blumenthal の12歳が最年少、Kofler の75

図 4 症例 7 の手術所見

表 2 嚢胞壁の上皮

	上 皮 層
多列円柱上皮	2
多列円柱上皮 + 立方上皮	3
杯細胞	2

以内が2例で、計6例は1年以内に来院しており、最短は2週間、最長は20年であった。この病歴期間の長短については嚢胞の発育や感染および患者自身の認識の違いなどに関係があるようである。

3. X線所見および嚢胞の大きさ

われわれは造影X線写真によって嚢胞の大きさ、形および周囲の骨との関係を観察した。嚢胞の大きさは小指頭大4例、拇指頭大5例で、形は円形5例、橢円形4例(図3)であり、従来の報告と同様であった。骨表面に嚢胞の圧迫所在部位に一致して、上顎骨の前面に、軽度の盂状の陥凹がみられる症例があったが Seward⁽⁴⁶⁾は切歯部の根尖部上方まで圧迫性の骨吸収像がみられる症例があり、また骨の陥凹が鼻切痕に及んでいる症例では、梨状孔下縁の非対称性がみられる^(33,34,52)といわれている。

4. 内容液

本嚢胞の内容液は淡黄色のわずかに混濁したやや粘稠性の液体であるが、感染を経過した症例では黄褐色、淡黄褐色、緑黄色、赤褐色あるいは黒褐色などの色調を呈するものが多いといわれている。われわれが内容液を観察できたものは7例であるが、漿液性6例、粘稠性1例で、色調は淡黄褐色4例、黒褐色2例および赤褐色1例で、いずれも多少混濁していた。内容液の混濁は剝離上皮細胞、多核白血球、赤血球などによるといわれているが、この点についての検索は行わなかった。内容液中にコレステリン結晶を含む症例も報告⁽²⁷⁾されているが、われわれにはそのような症例はなかった。また、内容液の生化学的分析に関する報告^(22,39~41)もみられるが、症例数が少

図 5 症例 5 の嚢胞壁の組織写真 (H-E 染色, ×300)

2層性の円柱上皮で被覆されており、結合織内に腺組織がみられる。

図 6 症例 7 の嚢胞壁の組織写真 (H-E 染色, ×300)

多数の杯細胞がみられる。

なく、本嚢胞を特徴づけるような結果は得られていないようである。

5. 治療と予後

治療は口腔側から摘出するのが最良とされ、完全に摘出されれば再発することはない。われわれの9例も全例が口腔側より摘出された(図4)が、手術所見で上顎骨前壁に圧迫性骨吸収が認められたものが3例、嚢胞壁と鼻腔底粘膜との癒着が2例で、4例は骨吸収がなく、周囲組織からの剝離も容易であった。

6. 病理組織学的所見

組織学的検索は6例に行われた。上皮の被覆は6例中5例にみられ、1例には上皮がなく線維性結合組織の被膜であった。また結合織内には全例に中等度の炎症性細胞浸潤がみられた。上皮の種類は多列円柱上皮が2例、多列円柱上皮と立方上皮の混在が3例であり(表2)、後者の1例には一部に線毛上皮が認められた。腺組織は全例に存在し(図5)、2例には上皮内に杯細胞(図6)

がみられた。

本嚢胞の上皮は線毛円柱上皮，立方上皮および重層扁平上皮，あるいはこれらの混在といわれており，近藤らの86例の統計では，円柱上皮（線毛上皮を含む）47例，立方上皮7例，重層扁平上皮3例およびこれらの混在9例となっており，Roed-Petersen の64例では，多列円柱上皮26例，多列円柱上皮と立方上皮の混在15例，多列円柱上皮と重層扁平上皮の混在9例，立方上皮と重層扁平上皮の混在7例，立方上皮4例および3種の上皮の混在が3例となっている。重層扁平上皮は2次的な炎症性変化による上皮の化生の結果とされているが，われわれの症例には重層扁平上皮はみられなかった。Roed-Petersen は64例中22例に線毛上皮がみられたと報告しており，またRoed-Petersen は33例に，Shear は⁶⁾5例中4例に杯細胞がみられたと述べている。嚢壁内に腺組織が存在することが多く，このことから，本嚢胞は Blumental および Klestadt らが述べているような顔裂性嚢胞に属するものではなく，貯溜嚢胞であると考えの人が少ない。しかし近藤らによると，腺組織と嚢胞内壁との関係が確認されたのは86例中8例のみであり，またShear も同様な所見は5例中1例のみと報告しているように，本嚢胞の成り立ちと嚢壁内に存在する腺組織との関係については，多数例による慎重な組織学的検索が必要であると思われる。

結 論

1965年1月から1977年12月末までの13年間に経験した鼻口唇嚢胞9例について検討して次の結果を得た。

1. 頻度は同期間に経験した顔裂性嚢胞48例中約19%であった。
2. 性別は男2例，女7例で，その比は1:3.5であった。
3. 年齢は30歳代および40歳代がそれぞれ3例で多く，最年少は23歳，最年長は66歳で，平均年齢は40歳であった。
4. 主要症状は全例が鼻翼部および鼻腔底の腫脹で，3例には口腔側の腫脹がみられた。
5. 病歴期間は6例が1年以内で最も多く，最長は20年であった。
6. 嚢胞の大きさは小指頭大4例，拇指頭大5例であった。
7. 内容液は漿液性6例，粘稠性1例で，色調は淡黄褐色4例，黒褐色2例および赤褐色1例であった。
8. 全例が口腔側から摘出され，予後は良好であった。
9. 組織学的検索が行われた6例中5例に多列円柱上皮または立方上皮による被覆がみられ，2例には杯細胞がみられた。また全例に結合組織内に腺組織が認められた。

本論文の要旨は，昭和53年9月第23回日本口腔外科学会総会（盛岡）において発表した。

引 用 文 献

- 1) Gorlin, R.J.: Thoma's oral pathology. ed 7, Mosby Co, St Louis, 1974, p 458.
- 2) Shafer, W.G., et al.: A textbook of oral pathology. ed 3, W.B. Saunders Co, Philadelphia, 1974, p 71.
- 3) 伊藤秀夫：嚢胞，最新口腔外科学。医歯薬出版，東京，1975，40，593頁。
- 4) 石川梧朗，秋吉正豊：口腔病理学Ⅱ。永末書店，京都，1975，849頁。
- 5) Killey, H.C., Kay, L.W.: Benign Cystic Lesion of the Jaws, their Diagnosis and Treatment. ed 3, E & S. Livingstone, Ltd, Edinburgh & London, 1977, p 114.
- 6) Shear, M.: Cysts of the Oral Resions. ed 1, John Wright & Sons LTD, Bristol, 1976, p 86.
- 7) 久保猪之吉：上顎粘液腺嚢腫（新称）について。大日耳鼻会報 26: 262 1920.
- 8) 林 成夫：鼻底部粘液腺嚢腫について。耳鼻咽喉 6: 921 1933.
- 9) 重信正道：上顎性粘液腺嚢腫の1例について。慶応医学 14: 189 1934.
- 10) 早川富之助，他：上顎粘液腺嚢腫症例。耳鼻咽喉 24: 56 1952.
- 11) 小幡達男：上顎性粘液腺嚢腫の1例。耳鼻咽喉 25: 379 1953.
- 12) 大澤博之，他：鼻口蓋嚢腫の2例および鼻前庭嚢腫の1例。——特にその発生学的考察——。耳鼻咽喉 47: 351 1975.
- 13) 石井 正：鼻前庭外側壁粘膜下に生ずる線毛円柱上皮嚢腫知見併せて歯牙嚢腫と鑑別を要する上顎嚢腫に関する研究。大日耳鼻会報 33: 328 1927.
- 14) 代田源六郎：鼻前庭嚢腫について。日耳鼻 34: 46 1928.
- 15) 加藤二郎：本邦文献に表われたる上顎粘液嚢腫（鼻前庭嚢腫を含む）の統計的観察。東医事新誌 2927: 1086 1935.
- 16) 石氏三郎：鼻前庭嚢腫の1例について。耳鼻臨 34: 479 1939.
- 17) 小西 覚：鼻前庭嚢腫の1例。耳鼻咽喉 13: 331 1940.
- 18) 小西 録，他：鼻前庭嚢腫について。耳鼻咽喉 46: 1000 1940.
- 19) 近藤兼吉：鼻前庭嚢腫の1例。耳鼻臨 36: 337 1941.
- 20) 梅村正道：鼻前庭嚢腫症例及びその統計的観察。耳鼻咽喉 22: 301 1950.
- 21) 石原 雄：鼻前庭嚢腫1症例。耳鼻咽喉 24: 216 1952.

- 22) 佐藤イタロ, 他: 急性炎症症状を呈した所謂鼻前庭嚢腫並に上顎洞を占拠した大なる濾胞性歯牙嚢腫. 東女医大誌 24: 229 1954.
- 23) 下村 融: 鼻前庭嚢腫の1例. 日赤医学 8: 259 1955.
- 24) 市原鶴子: 鼻前庭嚢腫2症例. 東女医大誌 25: 577 1955.
- 25) 佐藤清雄, 他: 鼻前庭嚢腫3症例. 耳鼻咽喉 28: 598 1956.
- 26) 松本 明: 鼻前庭嚢腫症例. 耳鼻臨 50: 188 1957.
- 27) 中島雪夫, 他: 鼻前庭嚢腫の2例. 阪医大誌 18: 192 1958.
- 28) 三吉康郎, 他: 上顎部の嚢腫性疾患——臨床統計と走査電顕像——. 耳鼻臨床 78: 479 1975.
- 29) Arnoldi, W.: Über die Genese der Nasenvorhofzysten. Laryngol Rhinol Otol 18: 58 1929.
- 30) Rosenberger, H.C.: Fissural cysts. Arch Otolaryngol 40: 288 1944.
- 31) Miller, J.B. and Moore, P.M., Jr.: Nasoalveolar cysts. Ann Otol Rhinol Laryngol 58: 200 1949.
- 32) Oppenheimer, P.: Nasoalveolar cyst. Arch Otolaryngol 74: 342 1961.
- 33) Walsh-Waring, G.P.: Nasoalveolar cyst: aetiology, presentation and treatment six cases are reported. J Laryng Otol 81: 263 1967.
- 34) Santora, E.Jr., et al.: Nasoalveolar cyst. report of case. J Oral Surg 28: 117 1970.
- 35) 横矢幹雄, 他: 鼻歯槽嚢胞 (Klestadt 氏嚢胞) の1例. 日口外誌 6: 330 1960.
- 36) 河合 幹, 他: 鼻歯槽嚢胞の1例. 日口外誌 7: 102 1961.
- 37) 岡田 孝, 他: 鼻歯槽嚢胞の3症例について. 日口外誌 10: 292 1964.
- 38) 近藤栄二, 他: 鼻歯槽嚢胞の1例. 口科誌 17: 594 1968.
- 39) 久野吉雄, 他: 鼻歯槽嚢胞の2症例について. 日口外誌 16: 406 1970.
- 40) 佐藤田鶴子, 他: 鼻歯槽嚢胞の1症例. 日口外誌 19: 100 1973.
- 41) 鈴木 實, 他: 顔裂性嚢胞の病態——特に鼻歯槽嚢胞と鼻口蓋嚢胞症例の臨床所見と内容液の性状について——. 日口外誌 20: 29 1974.
- 42) Thoma, K.H.: Case reports. Naso-alveolar cyst. Am J Orthod 27: 48 1941.
- 43) Boone, C.G.: Nasoalveolar cyst. Oral Surg 8: 40 1955.
- 44) Atterbury, R.A.: Nasoalveolar cyst. Oral Surg 14: 769 1961.
- 45) Rosen, M.D.: Naso-alveolar cyst. Report of case. Oral Surg 14: 148 1961.
- 46) Seward, G.R.: Naso-labial cysts and their radiology. Dent Pract 12: 154 1962.
- 47) Burttschi, T.A. and Stout, R.A.: Bilateral nasoalveolar cysts. Oral Surg 16: 271 1963.
- 48) Rhymes, R.: Nasoalveolar cyst. report of case. J Oral Surg 21: 435 1963.
- 49) Waldrep, A.C., Jr. and Capodanno, J.A.: Bilateral nasolabial cysts. report of case. J Oral Surg 24: 347 1966.
- 50) Crawford, W.H., Jr.: Nasolabial cysts. report of two cases. J Oral Surg 26: 582 1968.
- 51) Roed-Petersen, B.: Nasolabial cysts. A presentation of five patients with a review of the literature. Br J Oral Surg 7: 84 1969.
- 52) Brandao, G.S., et al.: Bilateral nasolabial cyst. Oral Surg 37: 480 1974.
- 53) Blumenthal: 16) より引用.
- 54) 平田: 15) より引用.
- 55) Skupka, W.: 20) より引用.